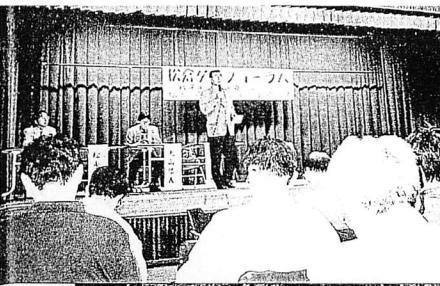


市水道局の松倉川取水場には1日最大4万トンの給水能力がある



(左上)行政が考へた松倉川の生態系の解説などを愛好するナチュラリストが多い。

川への関心を高めた市民たち
新聞報道でダム計画を知った市民の間からは、直ちに動きが起きた。「南北海道自然保護協会」と「街づくり函館市民会議」の二団体が行政に質問状を提出し、計画内容を検討していく。やがて、両団体が中心になって広く市民に呼びかけて九五年春、松倉川を考える会が発足した。

活動の基本は「松倉川の生態系の解明」「流域の自然保護」「ダム計画の検証」。メンバーは、登山や釣り、植物観察などを愛好するナチュラリストが多い。

松倉川の調査や探検、写真展、行政との話し合いなど、一連の活動は、同会が中心的な役割を果した。昨年六月には、函館土現と市水道局の担当者を招いてフォーラムを開催。松倉ダムをテーマにしたNHKの報道番組が放映されたこともあって、道内外に知られるようになつた。こうした経過などは、同会編集の単行本

川への関心を高めた市民たち

〔清流 松倉川——私たちの川、いま書かれている。〕

湯の川中学校の生徒が松倉川の壁新聞を作る、というので協力している。

去年、函館東高等学校の生徒たちは我々の活動を一年間、ビデオで追っかけて全国コンクールに出展した。年配の人には昔の自然が失われてきたことへのやるせなさ、不要な公共事業に対する違和感があり、勉強している人が多いです。

よ。スライド上映会のあとで、『うまい水が飲めなくなるので、ダムを止めてください』と、おばあちゃんに言われたのが一番心に残っている。川に対する市民の感じ方が変わってきた様子が伝わってきますよ」

昔の自然が失われてきたことへのやるせなさ、不要な公共事業に対する違和感があり、勉強している人が多いです。

昔の自然が失われてきたことへのやるせなさ、不要な公共事業に対する違和感があり、勉強している人が多いです。

昔の自然が失われてきたことへのやるせなさ、不要な公共事業に対する違和感があり、勉強している人が多いです。

昔の自然が失われてきたことへのやるせなさ、不要な公共事業に対する違和感があり、勉強している人が多いです。

「必要性」めぐつて検証作業を

ダム事業の主目的は、洪水調節と水道水の確保とされている。

治水面からの建設理由について、函館市現側は、

①松倉川流域の治水安全度が低い
②市街化が進んで、下流に住宅密集地が多い

③遊水地を造つているが、より抜本

的な治水対策が必要である

が、治水対策にはダム建設以外の方

法も考えられる。

堤防の整備や遊水地づくり、低地の住宅の嵩上げ、河口部近くでのミニ放水路の掘削など、知恵を絞れば代替策

はいくらもある。すでに道は、市内

は、次のように指摘する。

「周辺の町がベッドタウン化して、市の人口は少しずつ減つていて、三

年後に増えるとは考えにくい。汐泊川の取水堰は余り稼働しておらず、この夏の渇水期でも、最後の最後まで使われなかつた。導水管からの漏水水量を見直せば、水は潤沢にあるはず。谷地頭温泉のような試みは、他の公共施設でもやってほしい」

当初計画によると、総事業費に占める函館市の受益者負担額は八十二億円にのぼる。負担金はいづれ上下水道料金に上乗せされる。ダム事業に乗ることが最善策なのかどうか——具体的なデータを基にして、もっと論議を深めるべきだろう。

松倉川を考える会事務局長の鎌鹿さ

すつたもんだ揚げ句、ようやく七月月中旬に発表された道の「時のアセスメント」の対象六事業のひとつが松倉ダムだ。再評価の理由は、実施要綱が

言う「施策の円滑な推進に課題を抱えており、長期間停滯するおそれがある」と認められる」事業だからである。

泥沼化する前に点検し、「中止か、繼

「時のアセス」の手本にしよう

市は今年四月、水需要予測をまとめた。水洗化人口の増加や核家族化による世帯人員の減少、浴室や洗面所の大規模化、経済活動の活性化——などの増加要因を挙げたうえで、二十年後の給水人口を三十二万人と想定し、一日の最大給水量を十七万一千トンとはじめだしている。この想定では、現有施設

のままだとピーク時には一万六千トン

と、同会事務局長の鎌鹿隆美さんが市民の関心の高まりを説明する。

同会はいま、松倉川の魅力を伝えるビデオ制作を進めている。渓谷美や野生生物の姿、紅葉の森林などを収録して、三十分程度にまとめる。

「川は生命維持装置であり、町のひとつの象徴。ビデオは自然を活かしたものだから、皮肉な話ではある。

ショウ」(鎌鹿さん)

同会は今後、源流域の湿原から中流に至る松倉川を、学術指定地域などに

する活動を地道に続けながら、引き続

きダムによらない利・治水計画を提案していく。ダム計画がきっかけで、身

近な自然を見つめなおす機運が高まつたのだから、皮肉な話ではある。

●「休止」が決まった函館・松倉ダム計画

行なわれたにすぎない。ダム湖の予定地は道有林なので、対地権者との問題もなかつた。が、ここにきて「時のアセス」との関連で、幅広い市民を対象にした説明会を開催する準備が進んでいる。

道河川課ダム室は、「地元には、環境問題などでさまざまな意見があり、合意形成が必要になつていて。従来は、地権者に対する説明だけで進めてきたが、そうしたやり方では事業が長期間停滞してしまう。そこで、治水計画などについて説明することにした。(説明会の目的は)事業説明と、「時のアセス」の流れの両方の側面がある、と理解してほしい」として、この場が「時のアセス」の公聴会を兼ねるもの、と位置づけてい

る。函館土現治水課では、「初めてのことなので、説明会の次の段階までは決まっていない。さまざまな意見を踏まえて、合意形成に向けていきたい」(中田敬人課長)と、暗中模索のようだった。

函館市は、建設省の「休止」決定や「時のアセス」の行方を見守る構え。「道が地元自治体の考え方を十分聴取するというので、推移を見て対応したい。

評価作業をへて、ゴーサインが出ることを期待している」(水道局幹部)と言ふものの、事業見直しの流れにあきらめムードも見え隠れする。

「時のアセスは画期的な制度であり、期待は大きいが、審議内容がどうなるかが問題」と見る、松倉川を考える会代表の中尾繁さん(北大水産学部教授)は、次のように提言する。「道は、事業に対する考え方を示せばよく、「時のアセス」とは別個に説明した方がいい。函館の百年先をみたときに、治・利水の観点から松倉川をどう位置づけるのか——市民と行政が議論して方向づけをしてはどうか。代案をめぐる話し合いのなかで合意形成を図つてほしい」

市民の前に計画が明らかになつてから五年近い歳月が流れた。いま、松倉ダム問題は、「事業を見直して、代替策を積極的に議論しあい、大方の市民が納得できる道を探る」という、これまでの行政と市民が対立する図式を超えた、「合意形成の実験場」になろうとしている。他の公共事業見直しのモデルケースを目指して、行政と市民が切磋琢磨してほしいものだ。